

報告別講評

A. 研究部門・報告 I

西垣 知佳子

英語4技能のパフォーマンスにおける明示的知識、自動化された明示的知識、および暗示的知識の相対的重要度の解明

【研究者：石原 健志】

日ごろの授業では、文法の説明はできても即興的に英語を書いたり話したりすることが難しい生徒は少なくない。その状況は文法の理解不足だけでは説明できない。本研究は、中学2年生を対象に、英語の文法知識を「明示的知識」「自動化された明示的知識」「暗示的知識」の側面から測定し、それぞれが4技能にどのように寄与するのかを構造方程式モデリング(SEM)によって実証的に検証した。その結果、特に、自動化された明示的知識が4技能すべてに安定した正の影響を示した点に注目したい。この結果は、文法規則を理解した後、繰り返しの練習と実際の使用を通して処理が速くなるというスキル習得理論の枠組みと整合しており、授業中の練習や産出活動の重要性を支持する。また、明示的知識が直接的に技能向上へ結びつくのではなく、自動化を介して間接的に効果を及ぼすという点も、授業中の文法指導と技能育成の関係を考える上で有益な示唆を与える。

一方で、暗示的知識が4技能に有意な影響を示さなかった点については、学習者の年齢・学年から考えて暗示的知識の形成が十分でない可能性や、測定方法の妥当性に関わる問題が考えられるため、今後さらなる検証が期待される。

以上のように、本研究は文法知識の質的側面を区別し、その働きを明らかにした点で高く評価される。特に、自動化の重要性を実証的に示したことは、授業での文法学習と英語運用力育成をどのように橋渡しするかを考える上で重要な手がかりを提供している。

A. 研究部門・報告 II

小泉 利恵

高等学校の観点別学習状況の評価における教室内英語テストの妥当性検証と改善

【研究者：大鋸 雄介】

英語の定期テストやパフォーマンステストの観点別学習状況の評価は、全国で現在行われている。しかし、その妥当性はどうなのだろうか。大鋸氏は、ある高校においてその問い合わせを、論証に基づく妥当性検証アプローチの「領域定義推論」と「波及効果推論」の観点から詳細に分析した。その結果、妥当性の肯定的な証拠と改善点が整理された。

大鋸氏の研究の長所の一つは、教師と生徒への質問紙調査と専門家によるレビューを組み合わせて丁寧に問い合わせを調べたことである。内部関係者と外部の専門家の視点は異なり、それぞれを活かして解釈を深めている。この方法は、観点別学習状況の評価実践の質を高めたい小中高の教師にも参考になる。

今後は、本研究で扱えなかった論証に基づく妥当性検証アプローチの「得点化推論」、「一般化推論」、「説明推論」、「外挿推論」、「利用推論」の5点からの検討を進めてほしい。形成的評価と総括的評価を兼ねる教室内英語テストには、学習進度を確認して全体を把握する役割と、学習に役立てるために生徒と教師が目標を設定し、学習後にそのプロセスと結果を振り返り、目標や学習方法を調整して次に活かすサイクルを支援する役割がある。その二つの役割のバランスをどう考え、論証立てで妥当性を確認していくか。その難題に対し、大鋸氏には、しなやかかつ大胆に取り組んでいただきたい。本研究は、その実現に向けた重要な一步を示す卓越した成果である。

A. 研究部門・報告Ⅲ

竹内 理

生成AIを用いたループリック評価の妥当性と可能性の探究：教員評価と生成AIによる評価の比較研究

【研究者：大和田 彩】

本研究は、高校生の英作文に対する教員による評価と生成AIによる評価を比較し、AIを活用したループリック評価の妥当性を検証することにある。その結果、文法・語彙・構成といった形式的な観点ではAIと教員の評価が高い一致度を示すが、本研究のおもしろい点は、内容や主觀的態度の採点に関しては、教師の方が、AIよりも高めの評価をする傾向が示された点であろう。これは、生徒の実態を見て、良いところを積極的にくみ取ろうとする教師の行動を反映しているものと考えられ、教師が動機づけなど様々な側面を考えながら評価をしている実態を浮き彫りにしているものと思われる。一方で、形式的な側面に関しては、ループリックを整備することで、一貫性を維持した評価が、AIを活用することで可能であることも示した。このことは、形式面であれば、「作文回数を増やしても、AIに評価やフィードバックを任せることで、負担増を生み出さない」ということも意味しており、well-beingが重要視される時代の朗報ともいえよう。

著者は、上記の結果をしっかりと理論的枠組みと統計手法に依拠しながら導いており、この面からも高い評価に値する。これから生成AIはますます発展していく、教師を凌駕する面が多く出てくることは間違いないだろう。しかし、AIに任せてしまえない側面も確かに存在しているのだ。この点を明らかにし、棲み分けが必要であるということを示した本論文は、とてもタイムリーなものといえよう。

A. 研究部門・報告Ⅳ

寺内 一

基本的心理欲求の充足が小学校における外国語学習の楽しさと学習者エンゲージメントに与える影響

【研究者：中西 洋平】

本研究は、小学校外国語教育における児童の「外国語学習の楽しさ」と「学習者エンゲージメント」に焦点を当て、その背景要因として「基本的心理欲求の充足」を位置づけた実証的研究である。

2020年度の学習指導要領改訂以降、正式教科となった外国語科の授業実態を心理的側面から捉えた意義は大きい。日本の小学校5・6年生369名を対象に、信頼性の高い既存尺度を児童向けに改訂し、部分最小二乗構造方程式モデリングを用いて分析した点も新規性が高い。結果として、基本的心理欲求の充足が「外国語学習の楽しさ」を介してエンゲージメントを高めるという媒介的関係が示され、学習の「楽しさ」が児童の主体的な学びを支える心理的基盤であることが実証的に裏づけられた。児童を対象とする複雑なモデルの検証には限界があるものの、理論と実践をつなぐ試みとして価値が高い。特に、自律性・有能感・関係性という基本的欲求が小学生段階からどのように支えられるかを探る視点は、今後の英語教育の基盤づくりに寄与するだろう。また、分析に用いられた各尺度の信頼性係数が高く、測定の厳密さが確保されている点も注目される。

今後は、授業観察や教員インタビューを通じて量的結果の背後にある要因を明らかにすることで、授業設計への具体的な示唆を提供することが期待される。児童が安心して学び、楽しさを実感できる外国語教育のあり方を探る上で、本研究は貴重な基盤を提供している。

A. 研究部門・報告V

斎田 智里

多肢選択式読解問題における本文の語を含む割合を調整した正答選択肢の調査

—生成AIを用いた選択肢の作成方法の検討—

【研究者：若松 千智】

生成AIを定期テストに活用したいと考えている教員は多いだろう。若松氏は、多肢選択式の正答肢の作成に生成AIを活用し、本文の内容語が含まれる割合を調整することで、解答傾向がどう変化するかを詳細に検討した意欲的な作品である。生成AIの定期テスト活用への心理的ハードルを下げるに貢献するだろう。テスト研究の観点から、次の3点を指摘しておきたい。

(1) 正答率：テストデータは、行に受検者、列に項目をとり、各セルには各受検者の各項目の解答(例: 正答=1, 誤答=0)を入力する。テストデータを横に集計すれば、受検者ごとの(得点)正答率が、縦に集計すれば、項目ごとの正答率(難易度)が示される。どちらも同じ「正答率」なので、混乱が生じる場合がある。どちらの意味で「正答率」という用語が使用されているのかを意識しながら、分析や解釈を行う必要がある。

(2) 技能：観点別評価を行う際、4技能の「技能」を、「知識・技能」と「思考・判断・表現」に分けることになる。4技能の「技能」と「知識・技能」の「技能」とはどう違うのか。教員や研究者によって解釈がまちまちといってよい。用語の表面的意味に引きずられず、各技能の構成概念を明らかにして、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の分類根拠を明確にして作間にあたりたい。

(3) 生成AI：プロンプトには、使用目的に対し、できるだけ細かい条件を入力し、明示的に指示をすることが求められる。あいまいなプロンプトでは、あいまいな結果しか得られない。生成AIを活用した教室内テスト研究の一層の発展を期待したい。

B. 実践部門・報告I

竹内 理

高等学校におけるCLILを用いた思考力・表現力を養う授業の開発と評価

【研究者：出尾 美由紀】

本実践は、高校において、内容言語統合型学習(CLIL)と対話型鑑賞(VTS)という枠組みを取り入れた英語授業を実践し、それが生徒の思考力と表現力の向上にどのように寄与するかを検証しようとしたものである。検証の結果、理由や根拠を伴う説明の増加、創造的・推測的発話の活発化、生徒同士の協働的な対話や構文的多様性の拡大が確認されたという。これらの変容は、文法・構文の習得にとどまらず、論理的かつ相互的な対話能力の向上にも本実践が影響している可能性を示唆しており興味深い。また、本報告では、教科横断的要素も含む実践を細やかに説明し、次に続く実践者の指針を示している点も、大いに評価に値するであろう。

本実践は、1つの(特定の)学校での試みで、しかも少人数の生徒を対象とした、対照群なしの試みであるため、状況に影響された(situatedな)結果となった点は、致し方ないかと思われる。それでも、あとに続く実践への道標となるために、今回の特定状況を詳細に記述し、類似の実践がやりやすくなるよう情報を精一杯提供することが大切である。この面においても、本論文には随所に努力の痕が垣間見られ、好感が持てる。

実践を中心にして報告するか、検証を中心にして報告するかでも、著者は大いに迷いながら、本報告を執筆したと聞いている。その葛藤の中で、両者のバランスを保った良い報告書を作り出した著者の努力に、大いに敬意を払いたい。

B. 実践部門・報告Ⅱ

和泉 伸一

**教科横断型英語指導による
audience awarenessと語彙の育成**

—家庭科との横断を通して—

【研究者：鳥居 敦子】

英語学習指導要領に「目的・場面・状況」に注目して指導することが明記され、「目・場・状」が言葉のように広がったことは、コミュニケーション重視の英語教育に向けた大きな前進である。言葉は本来、具体的な状況の中で有用な意味を伝え合うために使われるものであり、それを意識してこそ真のコミュニケーション能力の育成が可能になる。

その中で、ライティング指導において見落とされがちのがaudience awareness(読み手意識)である。これは「誰のために、どんな目的で書くのか」を意識することであり、実際の手紙やメールで読み手を意識せずに書くことはあり得ないだろう。読み手が不明なままでは、何をどこまで、どのように書くかを判断できず、情報量や表現の適切さも決められない。筆者自身も論文やエッセイ執筆の際には、常に読み手を想定して内容や語り口を調整している。

鳥居氏の研究では、中学1年生を対象に、教科横断的な英語授業を通してaudience awarenessを育む指導の効果を検証した。その結果、この段階の学習者でも読み手を意識した書き方を模索できることが明らかになり、さらに、文化的背景を考慮したり語彙や表現を調整したりする兆しも見られた。

本研究は初学者を対象としたものであるが、今後は高校、さらには大学教育へこうした意識を継続的に育成していくことが重要である。こういった研究が今後も継続して行われていく中で、書き手中心ではなく、相手に伝わることを重視した「伝える・伝わる」ライティング教育が広まっていくことを大いに期待している。

B. 実践部門・報告Ⅲ

和泉 伸一

**イントネーション指導を統合した
音読活動:発話のComprehensibilityと
語彙保持に及ぼす効果**

【研究者：根子 雄一朗】

音読活動は中学・高校の英語授業で最も多く行われている活動の一つである。しかし、その多くは「何回読むか」といった量的な側面ばかりに重点が置かれ、どのように音読すべきか、何に注意して行うべきかといった質的側面への意識は十分とは言えない。とりわけ、せっかく声に出す活動でありながら、指導が声量のみにとどまり、具体的な音声指導が行われていないことは、とても残念なことである。

こうした中、根子氏の研究は音読活動における音声面での明示的指導に焦点を当てている。イントネーションやリズム・強勢の指導を音読活動に組み込み、その効果を実験的に検証したものである。事前・事後テストとして読み上げ課題を行い、学習者の発話を「理解しやすさ」(comprehensibility) および語彙習得の観点から分析している点が特徴的である。まさに「言葉は音声である」という原点に立ち返った研究といえるだろう。

結果として、リズム・強勢・イントネーションの指導は学習者の発話の理解しやすさを高めることが確認された。また、音声指導を行う際には、学習者の英語力や教材の難易度が認知負荷に影響を与えることにも留意すべきであると指摘している。したがって、教室で音声指導を取り入れる場合は、課題がどの程度学習者の注意資源を必要とするかを見極め、段階的に指導を進めることが重要である。

音読活動を単なる反復練習として終わらせず、音声的側面に焦点を当てることで、学習者は実際のコミュニケーションでも生かせる発話能力を身につけることができるだろう。本研究が、英語教育における音声指導のさらなる発展に寄与することを期待したい。

B. 実践部門・報告Ⅳ

西垣 知佳子

個別最適な学びを実現する複線型の 英語科授業を志向した探究的実践

【研究者：濱田 活仁／新美 徳康／福光 将仁】

本研究は、英語のプロセス・ライティング活動において、「複線型」の英語授業が、他の形態の英語授業と比べてどのような違いがあるかを調査した。具体的には、学習者が学び方を選択する「複線型」授業と、指導者が学び方を指定する「単線型」授業、および「準複線型」授業を比較して、ライティングの質と方略、また、学習者の自己調整と学習方略にどのような変容をもたらしたかを調査した。参加者は高等専門学校2年生3クラス116名であった。2回の実践を行い、事前テストと事後テストを比較した。

その結果、「複線型」授業で一定程度のライティングの質の向上が確認され、「複線型」授業における自己調整による学び方の有効性が明らかにされた。また、学習者による多様な学習方略の活用と自律が、英語力習得の効果的なアプローチであることも示された。その一方で、授業でのライティング方略については、使用の拡大はほとんど見られなかった。また、「複線型」授業の一部の学習者では、特定の学び方に固執するために、ライティングの改善に遅れが見られたことから、学習者の多様な学習スタイルやニーズに応じて個別に学習方略を柔軟に適用させるための支援が不可欠であることが示されたと言える。

本研究は、従来の受動的な「単線型」授業に対して、自己調整と主体的学習を促す「複線型」授業の有用性を明確にしており、授業での応用可能性も高く、適用範囲は広範囲にわたる。個別化された英語教育の効果を示した点において、英語授業の方法に新たな展望を提供するものである。

B. 実践部門・報告Ⅴ

小泉 利恵

高等学校のライティング指導における 生成AIの活用とその効果

—機能的適切さ(Functional Adequacy)に着目して—

【研究者：渡邊 大志】

生成AIをどう使ったら効果的かについては、教師が集まると必ず話題になる。しかし、使っている教師でも探索的に行っている場合が多いだろう。渡邊氏は、生成AIのGoogle Geminiを用いて指導と評価を行い、生成AI活用の一つの方向性を示した。まず指導では、授業外の自学ライティング活動を設定し、生徒は自力でドラフトを書き、プロンプトを使ってAIフィードバックを受け取り、AIのアドバイスに基づいてライティングを改訂して振り返った。評価では、AIと人による採点を両方行って比較した。その結果、自学ライティング活動では、実際に取り組んだ群のみで内容点が伸び、生成AIによるフィードバックの効果が示され、生徒からは肯定的と否定的なコメントが得られた。また、生成AIは人よりも少し高めのスコアを付ける傾向が見られた。

渡邊氏の報告書は、指導と評価両面での効果を研究した読み応えのある作品である。記述も詳細で、今後の生成AI研究でのモデルになるだろう。従来、生成AIが苦手と考えられてきた「内容」についても、AIが有用なフィードバックを提示できる可能性があること、また、授業外の自由選択課題での学習効果は一部見られるが限定的であること等、興味深い知見を導き出した。本研究は、今後教師が生成AIを用いてどのような指導や支援、評価を行うべきかを考えるための研究の有効なステップを示した力作である。渡邊氏には今後も関連研究を続けていただきたい。

C. 調査部門・報告 I

寺内 一

動機づけ方略に対する
英語教員の認識と実際の使用の
関係についての考察

【研究者：川光 大介】

本研究は、高等専門学校における英語教員を対象に、動機づけ方略(Motivational Strategies: MS)の効果認識と使用実態の関係、さらに使用に影響を与える要因を明らかにしたものである。

調査1では、MSの効果認識と使用頻度を比較し、両者の間に必ずしも強い相関が見られないことを示した。調査2では、教育環境や学習者特性など、既存研究で指摘された要因に加えて、高専特有の文脈的要因の存在を明らかにしており、教育現場に根ざした実践的意義が大きい。少人数ながらも質問紙と自由記述を組み合わせた調査設計は精緻であり、社会的望ましさバイアスへの配慮など、研究倫理の観点からも丁寧に実施されている。Dörnyei (2001) の理論を基盤としつつ、日本の特定のEFL文脈に焦点を当てた点も評価できる。さらに、統計的分析と質的データの両方を用いて、教員の意識と行動の差を多面的に捉えた点に研究の独自性がある。調査結果を Kawamitsu and Takeuchi (2024) の5因子構造と関連づけて解釈している点も、研究の一貫性を高めている。

今後は、他地域や他校種への拡張的検証を通じて、教員の信念、制度的制約、学習者の態度がどのようにMS使用に影響するのかを比較的に探ることが期待される。また、教員研修やFDプログラムへの応用を視野に入れることで、研究成果を実践に還元することも可能であろう。教育実践と理論研究との架け橋となる意欲的な研究であり、英語教育における教員研究と動機づけ理論の発展の双方に貢献することを願っている。